

詩篇 第126篇 4～6節
マタイによる福音書 第13章 24～30節、36～43節

説教 岡村 恒牧師

「このとき、義人たちは彼らの父のみ国で太陽のように輝きわたるであろう。」(43節)主イエス・キリストは詩篇126篇の言葉を、ご自分のことを話すように語られました。「涙をもって種まくものは喜びの声をもって刈り取る」(詩篇126篇5節)主イエスはこの詩篇のとおり、涙をもって種まかれました。神に絶望の叫びをあげて命の種をまき、終わりの日を待っておられます。この日ガリラヤ湖畔で、天国についてお話をなさりながら、やがて終わりの日に味わう喜びを、主イエスははっきり見ておられました。洗礼を受けて神の国に入れられる大勢の人を、主イエスは収穫の日の刈り入れの束のように喜んで抱え、神の国に入れられるのです。

マタイによる福音書を〈天国の福音書〉と呼ぶ人がいます。13章には天国の話が7つ出てきますが、そのうち4つは他の福音書には出てこない話です。マタイによる福音書は、主イエスの口から語られた言葉のうち、特に天国とはどういうものかという言葉に注目して書き記しているようです。それを聞いている私たちが、やがて終わりの日にどういう祝福に迎え入れられるかを知るようになるためです。やがて、領土や時間とは無縁な永遠の国が来ると聖書は約束します。その永遠の国に、主イエス・キリストが喜び踊るようにして、収穫の束を抱えて入れられるのです。

ある人が畑によい種をまきます。眠っている間に敵が麦の中に毒麦をまいたのです。当時の中東ではよくあったようです。この主人はしかし、しもべたちが途中で毒麦を抜くことを止めさせます。収穫の時が来るからです。それまで待ったらよいと主人は言います。

弟子たちはこのたとえの意味を問いかけました。主イエスはとても簡潔に説明をなさいました。「よい種をまくものは人の子である。畑は世界である。よい種とはみ国の子たちで、毒麦は悪いものの子たちである」(37節、38節)収穫の時が来たら毒麦だけが抜かれます。そして収穫の時とは世の終わりのことです。終わりの日の神の厳しい裁きの場面が描かれます。

時々、聖書をお読みになる方は誤解をします。神は愛の神だ。神ほど寛大な、愛に満ちた存在はない。そうして大きな誤解をして、何でも、誰でも赦されると考えます。しかし、神は聖い

正しいお方なので、正しくないもの・汚れたものを決して見過ごしになさいません。激しい怒りの火で神に敵対するものを焼き滅ぼさすお方です。最後には、全部赦して、受け入れてくださる、神とはそのようなお方ではないのです。

鎌を入れて収穫物を切り取る、それが収穫です。そこに生えたままでよい、というものではないのです。一度刈り取られ、よい麦と毒麦がはっきりと分けられるのです。聖書によると、本来よい麦に分けられる人間は一人もいません。主イエスはそのような私たちの世界に来てくださいました。毒麦を新しくして、神に喜ばれる収穫物に変えるためにです。一人でも多くの人が主イエス・キリストを信じて新しくされて神の国に迎え入れられる、その日を主イエスは心待ちにしておられます。

マタイの福音書に天国のたとえ話がたくさん出てくるとお話ししました。そのいずれも、主イエスの喜びが土台にあります。終わりの日を一緒に迎え喜びたい。その思いがたとえ話にあふれています。私たちには、全能の神のみ心を知ることはできませんが、神ご自身からそのみ心を明らかにし、隠された真実を見せて下さっています。赦されざるものを、主イエスという犠牲と引き換えに赦し、造り変えて受け入れ、神のものとしてくださる。これが隠されていた神の真実です。聖霊が助けてくださるので、主イエスが喜びのうちに神の倉に連れて行ってくださることを私たちは知るのでした。

パレスチナで、人々は収穫の時にお祝いをし神の恵みに感謝を捧げました。秋の収穫を祝うとき、私たちは同時に、神の国の収穫感謝をもって喜びます。主イエス・キリストがそうなさったからです。主イエスのたとえは、私たち一人一人が、世の終わりの日、神が収穫を喜んで下さるその喜びの中に自分自身を発見するための話です。

終わりの日は来ます。私たちはその日を心待ちにしながらこの地上の旅を生きていきます。そうして私たちが主をほめたたえ、証しをするとき、一人また一人、この喜びに加えられていくのです。そのための一日、一週間が、私たちに与えられていることを感謝しましょう。

(記 説教要約奉仕者)